

① 福祉バス撤退後の地域活動の確保について

長与町の福祉バスは、高齢者の外出支援、自治会やサロン活動、小学校の社会科見学など、世代を問わず町民の学びと交流を支え、地域を元気にしてきました。単なる移動手段ではなく、町民がつながり、地域が動き続けるための「地域の足」であり、多くの町民が利用してきました。人口減少が進み、高齢化が進む中、外に出る機会が減るほど社会参加は少なくなり、地域の活力は弱まります。だからこそ今、地域の活動を支える移動の仕組みを守り、可能であれば更に使いやすくすることこそが、今後の長与町に必要だと考えます。

仮に町営の「地域活動支援バス」として運行することができれば、福祉分野のみならず、教育、地域活動、防災、コミュニティ形成にまで役割を広げられます。利用ルールや運用方法を整理し、町民活動に寄り添う形で運行できるなら、これは単に「無くすべき古い仕組み」ではなく、これからの中与町に必要な未来への投資です。

以上の理由から、撤退後の対応として、町が責任を持って地域移動手段を確保する考え、そして町営運行も含めた新たな仕組みの検討について伺います。

- (1)これまで福祉バスとして果たしてきた地域活動への効果・役割について町としてどのように評価しているか。
- (2)社会福祉協議会撤退後に、地域行事・学校活動・サロン活動等で移動手段が失われた場合の影響について、どの程度の認識と想定をしているか。
- (3)新たに「地域活動支援バス」として、町が主体となった運行方法を検討する考えがあるか。他自治体事例把握も含め伺う。
- (4)対象団体・利用目的・運行ルール設定により法令上の適正運行が可能と考えるが、町としてどのように整理しているか。
- (5)国や地方創生関連事業の活用も含め、財源確保により公共的移動手段の確保が可能と考えるが、町として財源面での検討は進められるのか。

② 紙おむつごみ対策と将来の循環化に向けた対策について

長与町においても少子高齢化の進行に伴い、紙おむつごみの質が乳幼児用から大人用へとシフトし、将来的な廃棄量増加が見込まれます。紙おむつの再生については排水処理の課題等からこれまで困難とされてきましたが、近年、使用水量を従来の50分の1に抑える技術開発が進んでおり、一部自治体では回収やリサイクルの取り組みも始まっています。

また現在、紙おむつは本町でも燃やせるごみとして収集していますが、将来の焼却施設寿命の延伸やごみ減量化を考えると、紙おむつのみを別回収する方式の検討も必要と考えます。全国では、拠点ボックス方式や施設重点回収、戸別収集方式等、段階的導入の例もみられ、技術進展と合わせ検討余地は広がっています。

長与町として、将来のごみ処理の負担軽減と循環型社会形成の観点から、紙おむつごみの分別・資源化に関する技術動向、他自治体の先行事例の情報収集を進めるとともに、別回収の小規模実証についても検討を開始すべきではないかという観点から以下の質問をいたします。

- (1)紙おむつごみの現状排出量と今後の予測について、町の認識を伺う。
- (2)紙おむつごみに特化した研究・情報収集の必要性についてどう考えるか。
- (3)新技術の進展を踏まえ、将来の資源循環化に向けた検討を行う考えはあるか。
- (4)焼却施設延命とごみ減量化の観点から、拠点ボックス方式等の小規模別回収実証を行い、回収量・衛生・作業負担・コスト等を検証することについて、見解を伺う。